

IV. 実態調査検討委員が データを見て感じたこと、考えたこと

実態調査検討委員がデータを見て感じたこと、考えたこと

「箕面市子どもの生活実態調査」の概要や結果については、この報告書の2・3章にまとめたとおりである。

以下追記するのは、この実態調査検討委員が、実態調査票を作成し、その結果のデータを見るなど、この調査に関わってきた中で、子どもをめぐる状況や課題など見えてきたことのいくつかの点を、委員の意見として書き記したものである。

子どもの生活実態調査検討会議委員一同

3月7日

1. 生活スタイルの上での核家族化、子どもの成長にあわせて祖父母との関係が希薄になる傾向がある

2 世代世帯の核家族が約 8 割を占めている。

親の考え方として、子どもが低年齢（2 歳、5 歳）の家庭においては、祖父母を日常的な行き来や悩みの相談相手とする率が高いが、年齢が上がるにつれて、その率は徐々に下がっている。

また、中 2 や 17 歳の家庭においては、悩みの相談相手や教育やしつけで参考にしているのは、祖父母よりも配偶者や友人といった同世代が中心になる。

3 世代同居という居住形態だけでなく、日頃から訪問しあったり、悩みを相談しあったりして、物理的、また精神的に、家族とのつながりや家族以外の人間関係への広がりをもつことが大切と感じる。

2. 母子中心の親子関係になっている

父親について、子どもの夕食の食べる相手を見ると 2～4 割程度あり、また親の帰宅後の子どもとの会話について、「よくある」「ときどきある」をあわせると、どの年齢においても 8 割前後あり、頻度から見ると限りにおいて想像していた父子関係よりは強い傾向がある。

しかし、親の帰宅後の子どもとの会話や、父親・母親の好き嫌い、悩みの相談相手の面で、両親を比較すると、明らかに母親が父親より子どもに近い位置にある。

そのような状況を考えると、父親が物理的、時間的な面で、さらに子どもとの関わりを持つ必要があり、男女の労働形態、父親の育児休暇等、子育ての面から考えても、男女協働参画社会の実現にむけた社会システムの再構築を考えていく必要があるのではないかと考えられる。

3. 親も子も地域と関わる機会や意欲が少ない

親は近所と付き合いはあるものの、挨拶や声かけ程度が多く、困った時の助け合いや訪問し合う関係は、各年代を通じて 4～5 割程度、また子どもとの話題については、近所の出来事は 3 割程度

にとどまる。さらに、地域の子どものためにできることも、相談相手や一緒に遊んだりスポーツをするなどの積極的に子どもに関わることは1～3割程度にとどまっている。

一方、小3・小6・中2の子どもから見た近所とのつきあいは、「困ったときに話していける人」が5～20%にとどまっている。また、小6・中2の子どもが、地域の大人に望むこととしては、「悩みや将来のことについて相談にのってほしい」などの大人に手助けしてほしいという要求よりも、「子どものことをあれこれ言う前に、大人自身がきちんとしてほしい」「子ども扱いしないで子どもの意見を聞いてほしい」など、日常的な大人の態度や対応についての要求が高い。さらに、「特にない」が4割程度で、一番高い回答率となっている。

これを見ると、こども会などの地域活動や地域行事に地域差はあれ一定参加はされているものの、親子ともに地域に関わる機会が少ない、また積極的に関わる意欲が少ないのではないかと感じた。

4. 子どもの遊びの内容は変容し、異年齢間の交流機会も少ない傾向がある

子どもにとって、遊びは生活であり、心身の発達、社会生活能力の獲得、知識・知能の開発など多くの面で人間として成長するためには重要、かつ不可欠な仕事と言われている。

年齢とともに遊びも発達するが、2歳で「子ども同士でじゃれあう」「“いないいないばあ”などのやりとりで遊ぶ」が半数前後にとどまり、人との関わりが大切な時期としてはやや少なくなっている。5歳は次第に集団で遊ぶようになる年齢だが、「ままごと・ごっこ遊び」が6割、「かくれんぼ・鬼ごっこ」は3割程度にとどまっている。小学生でも「テレビやビデオ」「テレビゲーム」「本・マンガ・雑誌」などが4～5割程度と全般的に多く、「野球やサッカー」「かくれんぼ・鬼ごっこ」などの集団遊びはそれに比べて少なくなっている。中学生の放課後は、部活以外では「のんびりする」「テレビ」「本・マンガ・雑誌」「音楽を聞く」「テレビゲーム」などが多くなっている。

これらのデータや遊びの人数を見ると、大きな集団で遊ぶ機会が少なく、その中で上下関係を通じて、コミュニケーションや社会ルールを学ぶという機会が少なくなっているように考えられる。

5. 子どもの食事の取り方に問題が見られる

子どもにとって食事は、体の成長やコミュニケーションの場として重要である。

毎日朝食をとる子が7～9割程度の回答率は、高い数字とはいえない。特に乳幼児の1割が朝食をとらないというのは、将来の生活習慣や発育上よくない。

食事を毎日家族といっしょに食べる子は6割以上だが、父親が夕食をともにする家庭は3割にとどまる。また、夕食を一人で食べる子は中学生以上で1割を越え、「ひとりで」のみを単独に回答したのは、小3で13人、小6で29人、中2で109人と、孤食がわずかではあるが低年齢にも存在している。

食事の大切さを改めて認識する必要があると感じる。

6. テレビの存在が大きい

テレビやビデオを見る時間を見てみると、2歳で1～3時間が6割程度、小6で2時間ぐらいが4割、3時間ぐらいが2割、中2では2時間以上が6割程度と、子どものすべての年代で、生活時間の多くを占め、放課後の遊びや過ごし方の1、2位にあがっている。

また、夕食中に「いつも」もしくは「ときどき」テレビをつけている家庭が6～8割前後と、想像していたより高く、また年齢が上がると共に増加している。

さらに、中学生の約4人に1人は自分専用のテレビを持ち、情報の入手方法もテレビが中2・17歳で約9割で1位となっている。

現在、子どもの成長を考えると、テレビの存在や影響力を見過ごせない状況である。

7. 子どもは年齢に応じて習いごとや塾の長所、短所を再考する必要がある

「習いごと」は、その道に従ってその分野の能力を身につけることであり、得られる長所と共に、ルールに乗る・時間的に拘束されるという側面を合せ持つ。

2才では約15%が習いごとをしており、その約半数は週に2回以上である。また習いごとの理由の上位が「情操」「体力」「個性」とある。小3では9割近くが習いごとをしており、その7割は週に2回以上である。さらに小6では8割近くが習いごとをし、その3割強が週に5回以上通っている。

2歳は、子ども自身が意欲に満ちた体験を通し、基本的な生活習慣の面で自立心が芽生える時期である。このような年齢的な配慮も含めて、習いごとの長所・短所や習いごとをさせる意味・意義について十分考える必要性を感じる。また小・中学生では、子どもたちが忙しく、遊びの時間が短くなったり、遊びの時間がこま切れになるなど、その影響は大きいと思われる。

8. 親と子どものすれ違いが見える

子どもに接するときに心がけることで「話を聞く」という項目はすべての年代の保護者で7～8割程度を占めるが、子どもが親の好きなところの設問では、「話を聞いてくれる」「気持ちをわかってくれる」への回答は3～4割程度である。親の意識と子どものそれとは大きな隔たりがある。報告書〈資料編〉の自由意見の中で、親から言われて悲しい言葉が列記されているが、これらの言葉を見ると、状況によっては親は傷つく言葉を投げかけたという意識はないけれど、子どもが傷ついていることも多いと推測される。

また、小6・中2・17歳の、同年齢の子の行動に対する考え方では、親と子で大きな違いがあり、年齢が上がるにつれてその差も広がっている傾向にある。

今回の調査で、保護者の記入者はほぼ9割が母親であるが、家庭の中で近い存在である母親と子どもとの間で、これだけ大きな差があることを十分認識する必要がある。子どもと大人は、いろいろなことを話し合う中で、違いを認めあったり、各世代の考え方や価値観を理解することが必要である。

9. この調査票を通して感じた大切なこと

まず、17歳については、郵送での回収ということもあり、回収率が5割弱にとどまった。回答していない子どもたちの様子が分からないのがこの調査を通しての課題であった。17歳の抱える問題をクローズアップするには、アンケートとは違う手法での調査、研究が必要と考える。

2番目に、親の嫌いなところを挙げている中で、小6・中2において、各約100人が親から暴力を受けていると回答していることである。子どもの「暴力」のとらえ方にも格差はあるが、このように答えている状況は真摯に受け止める必要があり、学校や保健・医療現場、また近隣で、注意して見守る必要があるのではないか。また、親が暴力をふるうことなく、子どもとコミュニケーションをはかる手だてを学ぶ機会をつくる必要があると考える。

3番目に、小6～17歳の数%の数字ではあるが、「何でも話せる友達がない」「気持ちをわかってくれる人がいない」子どもは、親の評価が低く、友達が少なく、悩みはあるがだれにも相談せず、ゲームやインターネットをする率も高くなっている。

また、小6・中2では、他人からしかられた時、半数の子どもは態度を改めるが、約25%の子どもは腹を立てている。なかでも、「自分の気持ちをわかってくれる人がいない」「家出したいと思ったことがある」「自分のことが好きでない」子どもは、その割合が高くなっている。

「気持ちをわかってくれる」など自分を大切に思う気持ちを持つこと、また「何でも話せる友だちがいる」「悩みの相談相手がいる」など、すべての子どもが何らかの方法で、周りの人とのつながりを持ちながら生活ができる。そうしたまちづくり、地域づくりが重要であると考えます。